

**エッセイ風**

6月2日、3日と島外用務で池島を離れていた。不在の間、学校を守ってくれた教頭先生はじめ職員室の仲間には感謝しかない。HPを開けば、担当者がヤギの写真をフォトギャラリーにアップしてくれている。しかも、大風に備えてヤギ小屋の隣の部室を清掃し、避難所として開放する神対応まで。なんという頼もしさ、なんという優しさ。

6月4日。そんな温かい余韻に浸りつつ、3日ぶりの学校勤務を終えて帰路に就いた私の前に、島は「手荒い歓迎」を用意していた。

道路の真ん中で行く手を阻む、イノシシの親子である。私以外の職員の誰もが遭遇済みの中、私だけが未遭遇だった生き物だ。親イノシシは、私の車など一瞥(いちべつ)もせず、道路中央でのんびりとくつろいでいる。時計を見れば、気づけば5分経過。だが、私も急ぐ旅ではない。

「ほう、ついに会ったか・・・。」

至近距離で観察する野生の姿はなんとも穏やかで、私の心はすっかりほっこりモードに包まれていた。

しかし、その前にすでにあいつにも出会っていた。

学校敷地内で鎌首をもたげていた影——マムシである。

ちょうど私の顔の前にあいつの顔がある位置まで、箒にのぼっていた。一瞬で血の気が引いた。あの冷徹な目が、とにかく怖い。

実は私、10年前に壱岐の学校にいた頃は、児童の下駄箱に頻繁に現れるマムシをことごとく退治し、子どもたちから「蛇殺し」という、およそ教員らしからぬ物騒な二つ名で崇められていた猛者(もさ)である。

しかし、10年のブランクは長すぎた。かつての「蛇殺し」の威厳はどこへやら、マムシの鋭い眼光を前に、ただただ恐怖で足がすくむ。

頼もしい職員、温かいヤギ、お気楽なイノシシ、そして恐怖のマムシ。池島の生態系の豊かさと、自分の「蛇殺し」としての現役引退を、痛烈に実感した帰路であった。